

な か ま

発行

佐倉市立中央公民館
なかま編集係

〒285-0025

佐倉市鎗木町 198-3

電話 (043) 485-1801

2 ページ	謎々	坪井 栄子	佐倉の「一里塚」見学記	廣吉 正毅
3 ページ	シーサーを撮る	長谷山 巖	ざくろ	林 久子

「波の伊八」と 「幻の名工又八」を訪ねて

横山 詔正



市民カレッジで斉藤泰嘉先生から葛飾北斎に影響を与えた「波の伊八」という欄間彫刻師がいたと教えられる。生れは鴨川で、波を彫らせたら日本一だと言う。葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」はフランスに渡り、カミュ・クロードルの彫刻「波」やゴッホにまで影響を与えたが、その原点は「波の伊八」にあると言う。その作品が、いすみ市の行元寺に残されていると聞き、早速見に行きたくなった。クラス委員長に見学会を提案したら、フットワークも軽く、有志を募ってくれた。

蝉時雨の中、暑さを忘れさせてくれる杉木立の道をたどると立派な阿吽像が守る山門に至った。こんな田舎にこれ程立派な寺があることに驚かされた。この寺は、徳川家と関係が深い壇林で、ここで学んだ亮運は、上野寛永寺の学頭となり家光の師となった。寺の中に入ると住職の市原充氏が待っていた。江戸時代の著名な彫物師、高松又八郎の作品を紹介して頂く。又八は江戸幕府お抱えの彫物師、棟梁として上野寛永寺、芝増上寺等の徳川家の霊廟に絢爛豪華な桃山文化を継承した作品を残したが、第二次世界大戦ですべて焼失してしまったと思われていた。それ故幻の名工と呼ばれていた。ところが近年、この寺の欄間の「牡丹に錦鶏」「龍」等の三点と向拝の「唐獅子」「猿」「幕股

に龍」等五点が又八の作品と確認された。修復作業が行われ、製作当時の極彩色に彩られた作品が戻って来た。幾重にも塗り重ねられた下塗りの後、岩絵の具や金箔使いが見事。続いて、客殿にある波の伊八の「波裏の宝珠と月」を見せていただく。薄暗く、初めはよく見えなかったが裏に回り目を凝らすと波がまさに崩れる瞬間をとらえている見事な彫刻があった。授業では、中国の山水画の空間表現である、高遠、深遠、平遠の動的遠近法の三つを組み合わせ、時間の経過、視点の移動を感じさせる生きた波の表現に到達していると教えられた。事実それは、狭い欄間を乗り越えて飛び出して来る様な迫力を感じさせる素晴らしい波であった。

この彫物の価値は、北斎に影響を与えたかどうかだけでなく、これ自身が素晴らしい感動を与えてくれる点にあると思った。

(編集委員)

謎々

もんだい！と幼稚園児の孫達が叫ぶ。これが夫の至福の時の始まりの合図である。

夫は退職してから後、近所に住む娘のところの孫の幼稚園への朝の送りだけを買って出た。最初は一人の孫だけだったが、三歳違いの下の子まで連れての二人となり、やがて上の方が卒園したので、また一人だけの現在に至っている。孫達と言葉遊びをしながら公園にさしかかる。花咲く時期には花を愛で昆虫を追い、園内の遊具でひと遊びをし、隣接するお宮さんでお参りをすませて臼井支所の建物に入る。音楽ホールのストリートオルガンを眺めた後は、どの位体重が重くなったら自動ドアが開いてくれるのだろうか、足をドシンドシと確かめながら建物を出る。幼稚園までわずか十分位の道のりを三、四十分はかける。週五日

の夫の朝の日課は生き甲斐である、彼は市民カレッジの作文にも書いている。

言葉遊びはもう謎々に定着してこれが例のもんだい！の合図なのだ。この為に夫は図書館で何冊の本を借りた事か。孫を二人連れていた頃のあの日、いつもジョイジから問題を出されるけど今日は私達が出すねと、難問が出されて答えがわからないと夫が帰ってきた。上の孫は三歳も年下の妹と何をやっても勝つんだけど、どうしても勝てないものがある。それはナインダ？という。私も悩んだが降参。ママから教わった問題だというので娘に電話をした。娘はヒントを期間限定だというのが余計にわからない。ジャンケンポンして歳の数の手の形を見てちゃんと明かしてくれた。

確かに当時の姉は五歳、妹は二歳、ペアはチョキには勝てません。参りました。
(新臼井田 坪井 栄子)

佐倉の「一里塚」見学記

皆さん、ご存知でしょうか。ここ佐倉新町に、隠れた「歴史遺産」があることを。

先日、地域のボランティア活動をされている「佐倉歴史案内人の会」の方にそこを案内していただいた。

新町通りに面した三百坪ほどある敷地内の、優雅な和風庭園と築後百年余という古民家（商家と土蔵など）である。

同会がそっくり借り受け、ここをまちづくり交流センター「一里塚」と名付けて、今年の四月オープンしたという。

誰でもが佐倉の歴史の一端をしのびながら、休息と語らいの出来る場に、というのが設立の趣旨であるとのこと。

現在の建物は、桂小五郎ゆかりの旅籠「油屋」の跡地に呉服商「駿河屋」が建てたものだという。

特別な木材を使った柱、梁、

框など当時のまま。

築明治二十五年としてある古色蒼然とした土蔵も月日の経過や風雨には抗しがたく、^{ひさし}庇の瓦など半分が崩れかけている。ともに匠の技の冴えが随所に見られ驚かされる。

庭園もまた見もの。当時の石灯籠や庭石、敷石、井戸などがある。

屋敷内にいると明治のにぎわいが聞えてきそう。

手をこまぬいてこの遺産が荒廃していくことにもどかしさを感じる。

実に惜しい。文化財として何とか後世に残すべきではないだろうか。

皆さん、佐倉の「一里塚」へお子さんと出かけてみませんか。佐倉の歴史や文化に触れてみてはいかがでしょう。

(南臼井台 廣吉 正毅)



シーサーを撮る

沖縄では火伏せ、魔よけのために、赤瓦の屋根にシーサー（獅子）を据える。屋根シーサーは邪悪なものをにらみつけ吼えた姿になっている。たてがみ、太いしっぽ、雄たけびはシーサー像の基本形だそう。焼き物とちがつてムチゼーク（屋根左官）が漆喰で作るシーサーがどこかユーモラス。このシーサーを写真に撮ろうと沖縄を旅し八重山竹富島に行った。

竹富島の集落は条里で区画され、集落の一面に立つと巨大迷路にいる錯覚におちいる。島には観光牛車があるが徒歩でのんびりと島めぐりをした。島の道にはサンゴ砂が敷かれ一歩踏みだすと「ザック」と心地よい音が響く。民家のサンゴ石灰岩の石垣は思ったより低く庭では背の高い芭蕉の葉がたれ、ハイビスカス、ブーゲンビリアの花が原色の彩

りを放ち、赤い屋根からシーサーが私を睨みつける。ほとんど漆喰で作られユニークな表情をしている。ギョロ目、たれ目、太ったもの、痩せたもの、噛みつきそうなもの、ニヤケタもの、南国の強い日差しの暑さを忘れ、カメラのシャッターを切った。

村の中心に赤山公園があり「なごみの塔」の展望台から集落を見渡せば、実に美しい風景が目の前に広がる。赤い琉球瓦の家々が夢のようにならび、屋根ではシーサーが遠吠えをしている。行きつ戻りつ古き沖縄を心に刻み、そば処「竹の子」で飲んだオリオンビールの冷たさと、沖縄そばの味は格別だった。

シーサーを撮る沖縄の旅だったが、平和祈念公園の「平和の礎」に記された、二十三年余名の戦没者の名を前に心が痛み、冥福を祈るばかりであった。

（井野 長谷山 巖）

ざくろ

入梅時の灰色の空に、鮮やかに咲くざくろの花が好きだ。私の育った家の庭の真中にざくろの木があつて、朝、雨戸を開けると、朱色の花が目覚ましてくれた。

嫁いだ家には、沢山の樹木があつたが、ざくろはなかった。

嫁の身分では、自分の好きな木も植えることも出来ない。ので、外出の途中ざくろの花を見かけるとなつかしく、しばらく立ち止まって花に見とれ、里の庭を思い出していた。嫁いで十数年が過ぎ、やっとざくろの木を買うことが出来た。里のざくろは、花ざくろで実はならなかったが、二度目の木は花も美しいが、秋になると大きな実をつけて、ぱつくりと開いた口からルビーのような実がこぼれた。

ざくろの実人間の肉の味がすると云う人もあるので、

私はあまり口にする事はなかったが、宝石のような実は美しいものだった。その大好きなざくろの木を残して佐倉に越してきた時、私は一番にざくろの木を植えた。

里の花は朱色。嫁いだ家は実ざくろ。三度目は、花びらのまわりが白くて、少しちぢれてレースを思わせる花のざくろを選んだ。細かったその木も太くなり、つゆ時の空に、レースの花が貴婦人のような姿で咲いている。

（稲荷台 林 久子）



10月の黒板

『なかま』原稿募集のお知らせ

『なかま』の2・3面は、市内の皆様の投稿によって作られています。原稿は随時募集しています。

[原稿規定] 字 数 650字(13字×50行)以内。ワープロによる原稿(縦書き)でも結構です。

内 容 随筆・・・日常の出来事、生活の中で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などご自由にお書きください。

『なかま』に対するご意見・ご感想などもお待ちしております。

いただいた原稿は、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただきます。

問い合わせ 佐倉市立中央公民館 (第2・第4月曜日は休館日です)

電話 485-1801

URL <http://www.city.sakura.lg.jp/kominkan/cyuoou/index.htm>

さくら道



長年ひたすら仕事一筋に張り定年退職した男性たちは、食事というものは、テーブルに座れば出てきて、食べ終わると片づくものだと思っていた人が多いのでは？

それが違うと気付いても団塊世代以前の男性は、自分の妻には素直に感謝の気持ちをこせず、態度にも表せない人が多い。そこで、自分の気持ちを表

現できない不器用な男性諸君！料理教室に通うか、素直に妻に教わるかして料理に参加してはいいかなものか？と言いう私も自分で作ってみると、食事は「買い物」「調理」「片づけ」と想像以上に大変な作業に気付く、改めて妻が毎日食事を作ってくれた大変さがわかった。

妻の喜ぶ顔を思い浮かべながら一緒に食べる料理を作るのも幸せなことだと思う今日この頃である。

(六角)

あとき



甲子園の高校野球、北京オリンピックと賑わいの夏が終わり静寂が戻り、読書の秋が近づきました。今月も沢山の投稿有難う御座いました。

坪井様、お孫さんとの日常の楽しいやり取りが、言葉遊びの中から彷彿と浮かび上がってきました。

廣吉様、歴史の街佐倉の隠れた歴史遺産「一里塚」のご

紹介、有難う御座います。皆様も是非佐倉の歴史探訪を。長谷山様、沖繩の「シーサー」を写真撮影という行動の中からご紹介していただき、感心いたしました。

林様、さくろを愛されて数十年、一つのをずっと愛し続け、佐倉でも植えられたお気持ち伝わりました。

『なかま』は読者の皆様方の投稿で成り立っています。今後とも、皆様方のご投稿をよろしく願います。

(石崎)